

マルコの福音書概観：イエスにつき従う

今日からマルコの福音書を見ていきます。何度か間を挟みながら 2025 年のイースターまで約一年半かけてこの福音書を見ていこうと思います。マルコの福音書は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書の中で変わった存在です。福音書の中では最も短く、イエス・キリストの最初の使徒でも弟子でもなかった人によって書かれました。マタイ、マルコ、ルカの福音書はよく似ていて、同じ内容が多く含まれているので、これらの福音書は共観福音書と呼ばれます。ヨハネの福音書はこれらとは大きく異なり、共観福音書には含まれていない内容が多く含まれています。4つの福音書をこのように分ける唯一の理由は、どの福音書が最初に書き記され、他の福音書の土台となったかという議論があるからです。私が思うに、またこの書を学ぶ目的から言えば、すべての福音書は神の言葉であり、完全に聖霊の靈感によるものであるとするのであれば、どれが最初に書かれたかという議論は重要ではありません。テモテへの手紙第二 3:16 にあるように「16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」現在の学術的見地では、マルコによる福音書が最初に記され、マタイとルカがそれに基づいてマタイの福音書とルカの福音書が記されたとされています。ですが、そうであればマタイが使徒としてキリストの直接の目撃者であるという歴史的な事実を否定することになるように思えます。いずれにせよ、マルコではなくマタイが最初に書かれたという昔からの伝統的な見解を受け入れるべき理由は他にもたくさんあるものの、より重要なのは、どの福音書が最初かという無意味なことに捕らわれないことです。

福音書自体には記されていませんが、教会史の古い記述から、その著者はヨハネ・マルコであるとされています。それについて最も古い記述は、西暦 130 年頃ヒエラポリスの司祭であったパピアスという人が、彼の著書の中で、彼が「長老」と呼ぶ 12 使徒の一人かまたは使徒の弟子であった人物が、マルコがどのように福音書を書いたのかをパピアスに説明してくれたと記したものです。このことは後に重要となります。私たちのマルコとの最初の出会いは使徒の働き 12 章です。使徒の働き 12 章では、牢に入れられた使徒ペテロが御使いの助けで牢から救い出されたことが語られています。ペテロは牢を出て町に戻り、御使いが何をしてくれたのかを理解して、使徒の働き 12:12 でこう言っています。「12 それがあったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家に行った。そこには多くの人々が集まって、祈っていた。」つまり、マルコあるいはマルコと呼ばれていたヨハネの両親は信徒で、教会の集いのために自宅を開放しており、そのような家庭で彼が育ったことが分かります。マルコは若いころ、使徒パウロとバルナバと共に伝道旅行に出かけていたようです。使徒の働き 12:25 には「エルサレムのための奉仕を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、戻って来た。」とあります。ですが、その過程でマルコの若さゆえ、その奉仕を最後まで行うことが出来なかったようです。それは次に彼が登場するのは使徒の働き 15:36-40 ですが、そこには次のようにあるからです。「それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」37 バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネと一緒に連れて行くつもりであった。38 しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうがよいと考えた。39 こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」ですが、一度はパウロの信頼を失ったものの、イエスに従う者の中でマルコが最も忠実な信徒の一人となったのは明らかであり、パウロも幾度か彼を呼び寄せたり、その名を挙げたりしています。コロサイ人への手紙 4:10 では「私とともに囚人となっているアリスタルコと、バルナバのいとこであるマルコ」と言っています。パウロがマルコの同行を拒んだとき、バルナバがマルコの肩を持ったのは彼が親族だったためかも知れません。そしてテモテへの手紙第二 4:11 では、パウロはテモテに「マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」と述べています。パウロはマルコと共に宣教することを望んだのです。そして、ピレモンへの手紙 24 では、ピレモンへの挨拶の中で「私の同労者たち、マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカ」と述べています。最後に、使徒ペテロがペテロの手紙第一 5:13 でマルコについて言

及んでいます。「あなたがたとともに選ばれたバビロンの教会と、私の子マルコが、あなたがたによろしくと言っています。」

ペテロの手紙第一のこの箇所が重要な理由は、ペテロとマルコの関係ゆえにマルコの福音書が聖書に含まれることになったからです。マルコは使徒ではありませんでしたし、ルカの福音書は使徒の働きと共に全て起ったことを明らかにルカが緻密に調べて記したものでしたが、マルコにはそのような信用はありませんでした。ですが、先にお話ししたパピアスという人物によると、マルコがこの書を書いたと言う記述の中で、マルコがペテロから聞いたイエスに関する証言に基づいてこの書を記したことから、この書を擁護したことが分かります。教会史の初期のころから、マルコの福音書は聖書の中に含まれてきました。それは、マルコが使徒ペテロの宣べ伝えた福音を書き記していて、その歴史的な記録が正確であるとすれば、ペテロについての記述も事実として信頼できるという理由からです。福音書の中でペテロが直接関係している状況についてより詳細で色彩豊かな記述がされているのを見ると、それがペテロの直接の証言に基づいているからだというのは大いに納得できます。また、この書がペテロの失敗をより多く取り上げており、この書の最後で特に言及されている唯一の使徒がペテロであることにも納得がいきます。ペテロ第一 5:13 から、ペテロとマルコが同時期にローマにいたようであることが分かりますが、歴史的にもそこでこの書が記されたとされています。ペテロが「バビロンの教会と、マルコ」と言っていますが、ここでバビロンとはローマのことを意味しています。当時のクリスチャンはローマをこのように否定的に表現していました。ペテロはローマで死ぬことになりましたが、マルコはイエスの生涯と宣教についての教えである福音を世界中に伝えていくことになりました。執筆された時期はネロによる激しい迫害が始まる前の期限 63 年から 64 年の始めとされ、マルコがユダヤの伝統について言及している箇所がいくつもあることから、主に異邦人に対して記されたと思われる。この書の背景についてはもっとたくさん語れますが、今日はこの書のテーマを見ていきたいと思います。

マタイやルカの福音書と違い、マルコはイエスの系図を記していません。またヨハネと違い、イエスの神としての性質から語り始める訳でもありません。マルコはバプテスマのヨハネとイエスの洗礼から語り始めます。マルコの福音書 1:-10 「そのころ、イエスはガリラヤのナザレからやって来て、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられた。10 イエスは、水の中から上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった。」この出来事はもちろん重要ですが、マルコのテーマの中心でもある最初の弟子たちの召命という更に重要な出来事がその後起こります。マルコの福音書 1:16-20 「イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。19 また少し先に行き、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネをご覧になった。彼らは舟の中で網を繕っていた。20 イエスはすぐに彼らをお呼びになった。すると彼らは、父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。」ここでもともとシモンと言う名前であったペテロが、イエスに従うようにと言う召しを受けます。この事が、弟子になる事、あるいは今日の説教題である「イエスにつき従う」というこの書のテーマとなっています。これらの最初の弟子たち、特にこの書で大部分を占めるペテロの視点を通して、私たちは弟子であるとは、またイエスに従うとは何を意味するのかを知ります。

マルコの福音書の最初の 8 章では、イエスがご自身について言われた通りの方であることを確信するのに、ペテロと他の弟子たちが何を見て、何を体験したのかが記されています。彼らは、イエスが 6 つの点でイエスが肉体を持った神であることを示す特質を見ました。1 つ目に、彼らは霊的な悪に対するイエスの力を見ました。彼が悪霊を追い出すのを見ました。この書では少なくとも 9 回は言及されています。2 つ目に、イエスが偉大な医術者であることを示す癒しを見ます。ツアラアトからきよめられ、盲人が見えるようになり、耳の聞こえない人が聞こえるように

なり、手足の萎えた人が歩き、イエスの着物に触った女性が12年間の苦しみから癒されるのを見ます。3つ目に、自然さえ支配されるイエスの力を弟子たちと共に体験します。そのような状況の一つが、今年のVBSでの説教でも取り上げました、イエスが船の上から嵐を静めた場面です。また、わずかなパンと魚で5000人の男性に加え、女性や子どもまでもを満たすのを見ます。人間には不可能な事ですが、神にとっては何でもないことです。4つ目に、イエスが女の子をよみがえらせたことに、死を克服する力を見ます。これらの奇跡はもちろん素晴らしく、この福音書ではそれらの奇跡に重きを置いています（マルコの福音書には他の3つの福音書のどれよりも多くの奇跡が記録されています）、弟子たちがイエスと共に経験した霊的生活は、おそらくそうした奇跡以上に大きな影響を彼らに与えました。なぜなら5つ目に、神の子が父なる神と共に歩む人生を体験する中で、伝道中に、またゲッセマネの園で死を目前としたとき、イエスが祈られたのを目撃しました。これにマルコの福音書9章で、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが体験した変容という重要な場面も含めたいと思います。この場面で、ペテロはいつものように何を言えばよいのか分からず、馬鹿げたことを口にしてしまいますが、彼はマルコの福音書9:7で「そのとき、雲がわき起こって彼らをおおい、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」とあるように、父なる神が天から語りかけられるという関係を目撃しました。そして6つ目に、弟子たちは彼の教えを聞き、それによく耳を傾けました。マルコの福音書には、マタイ、ルカ、ヨハネの福音書にあるような長々とした教えはあまりありません。ですが、イエスが教え、弟子たちがそれに耳を傾けている重要な箇所があります。マルコ1:22に「22 人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。」とあります。

イエスに最初に従った者たちは、これら6つの事全て、そしてそれ以上のことを実際に体験しました。そのことが彼らを変えました。6章で、彼らが遣わされるにあたり、単に学ぶだけでなく、学んだことを他の人々に伝えるように、また悔い改めとメシアが来られたという良い知らせを伝えることによって、イエスのメッセージを宣べ伝えるようになるのを見ます。マルコの福音書6:7には「7 また、十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて、彼らに汚れた霊を制する権威をお授けになった。」とあります。そして12節では、「12 こうして十二人は出て行って、人々が悔い改めるように宣べ伝え」とあります。これも弟子訓練の一部です。イエスに従うとは、人々にイエスの事を伝え、自分たちと同じように信仰と悔い改めを伴う弟子となるよう呼びかけることです。弟子たちが経験したこれら全ての事は、マルコ8:29にあるこの書の核心の一つに繋がっています。そこではペテロがイエスの質問に対して「あなたは、キリストです。」と答えています。つまり、あなたはメシア、救い主ですということです。最初の8章に記された出来事はイエスの権威を示すもので、イエスが本当に待ち望んでいたメシアであり、ご自分の民を罪と捕らわれから救って下さる方であることをペテロに示しました。ですが、この書の後半では、イエスはペテロのメシア像を捻じ曲げ、メシアの歩む道は苦しみと死であると述べています。マルコの福音書8:31-33「それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。32 イエスはこのことをはっきりと話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。33 しかし、イエスは振り向いて弟子たちを見ながら、ペテロを叱って言われた。「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」この書の中でペテロの事が沢山取り上げられていますが、彼は決して自分を高めようとはしていません。マルコが語る彼のエピソードは、ペテロの負の側面を示しています。他の弟子たちと同じく、イエスがこれから3度に渡ってはっきりと語られたこと、つまりイエスが来られた理由は死ぬためであるということを理解することが出来ませんでした。イエスのご自身がメシアであること、なぜ彼に従うべきかを示しましたが、今度はご自分がメシアの型、救い主の型、つまり苦しみの僕であることを示されました。イエスは征服王になるつもりはありませんでした。苦難を通して救いをもたらしてくださるのです。弟子たちが自分たちの中で誰が一番偉いかについて議論している間、イエスは弟子たちに、ご自分に従うとは、自分が十字架の上で人々に仕えるように、彼らも他の人々に仕えることだと知るよう導いておられました。マルコの福音書9:33-35にはこうあ

ります。「一行はカペナウムに着いた。イエスは家に入ってから、弟子たちにお尋ねになった。

「来る途中、何を論じ合っていたのですか。」 34 彼らは黙っていた。来る途中、だれが一番偉いか論じ合っていたからである。 35 イエスは腰を下ろすと、十二人を呼んで言われた。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」

マルコの福音書は行動の書です。長文の教えはなく、代わりに動きと行動を伝える短い記述があります。彼らはここに来た。彼らはそこへ行った。10章まで全ての章がそのように進んで行きますが、11章に入ると、イエスの生涯の最後の週が始まり、ペースが落ち始め、ペテロが救い主が死に向かわれる間にキリストを3回否定すると告げられた、主の晩餐のことが記された14章へと進んで行きます。その後、ゲッセマネの園で祈っておられるとき、イエスが捕らえられるのを見ます。このことが、ペテロがマルコを通して自分の最大の過ちを語ることに繋がっていきます。マルコの福音書14:72「72するとすぐに、鶏がもう一度鳴いた。ペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と、イエスが自分に話されたことを思い出した。そして彼は泣き崩れた。」彼はイエスが最も必要とされた時にイエスに従えませんでした。そのことが、ペテロのその後の人生に深い影響を与えました。それは、この後、ペテロが否定した方、そして私たち全員が何らかの形で否定した方が、自ら進んで十字架にかかって下さり、私たちの罪と神の怒りの全てをその身に負って下さったからです。そして、その重荷の下でイエスはこう叫んだとマルコ15:34に記されています。「34そして三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」訳すと「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」

もちろんそれで終わりではありません。16章では、弟子たちがなぜイエスに従い続けているのか、キリストを否定したペテロ自身が、なぜ死ぬまでイエスに従い続けたのかが記されています。マルコ16:6で、死なれたイエスに香油を塗ろうとした3人の女性に、御使いは「驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められていた場所です。」と言われました。そして墮落した弟子ペテロのために、マルコ16:7に彼が聞くことができた最も素晴らしいメッセージが記されています。「7さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』と。」これがこの書の終わりです。9-20節はその後付け加えられた箇所であり、原文の一部としては相応しくありません。この箇所についてはマルコの福音書の学びの最後の説教で取り上げます。全ての終わりに、イエスに従うこととは完ぺきであることではなく、恵みであることを見ます。それは、ご自分を否定したペテロのために、イエスを否定したペテロのために、また救い主が必要な罪人である私たち皆のために十字架にかかって下さった、愛溢れる救い主を通してもたらされる赦しであります。この書は、十分に従えない者であるペテロについて書かれたのではなく、愛溢れる救い主イエスについて、そして私たちがイエスに真に従うとは何を意味するのかについて記された書です。祈りましょう。

Mark Overview Sermon: Following Jesus

Today we are starting the book of Mark. We will be in this book for roughly a year and a half with some breaks and end at Easter 2025. The book of Mark holds a unique place in the gospels, which consist of Matthew, Mark, Luke and John. It is the shortest of the gospels, and is written by a man who was not one of the first apostles or disciples of Jesus Christ. It is called a synoptic gospel which consists of Matthew, Mark and Luke because they are so much alike and contain much of the same material. John is a very different book and contains a lot of material not contained in the synoptic gospels. The arguments over which gospel was written first and was used as a basis for the other ones is the only reason we really separate the 4 gospels in this way. From my perspective and for the purposes of studying the book, I would simply say that the argument over which is first is not important if you accept all of them as the Word of God and fully inspired or breathed out by the Holy Spirit. As [2Timothy 3:16](#) says, [16 All Scripture is breathed out by God and profitable for teaching, for reproof, for correction, and for training in righteousness...](#) The current academic view is that Mark was written first and then Matthew and Luke relied on his manuscript to write Matthew and Luke. But this seems to deny that the historical fact that Matthew is a first hand witness to Christ as an apostle himself. Either way, there are many other good reasons to accept the ancient and traditional view that Matthew was written first not Mark, but more importantly to not get sucked into pointless arguments around which gospel is first.

The writer while not stated in the text has from the very earliest account of church history been stated to be John Mark. The first reference we have to this is around 130AD a man named Papias, the bishop or pastor of Hierapolis, put into his writing that someone he referred to as “the elder” who was either one of the 12 apostles or an immediate disciple of one of the apostles had personally described to him how Mark had written the gospel. This will be important later as well. We first meet Mark in Acts 12. Acts 12 tells us about the imprisonment of the apostle Peter, and how an angel intervened and freed him from prison. Peter leaves the prison and goes back into the city and when he realized what the angel had done for him [Acts 12:12](#) says, [12 When he realized this, he went to the house of Mary, the mother of John whose other name was Mark, where many were gathered together and were praying.](#) So, apparently, Mark or John Mark as he is often called grew up in a house where his parents were believers, and even hosted church gatherings or held worship services in their home. Early in his life as a young man, it seems that Mark traveled on mission trips with the apostle Paul and Barnabas. [Acts 12:25](#) says, [And Barnabas and Saul returned from Jerusalem when they had completed their service, bringing with them John, whose other name was Mark.](#) But it seems like at some point, Mark’s youthfulness may have kept him from completing that mission. Because, when we see him next time, it is in [Acts 15: 36-40](#). [36 And after some days Paul said to Barnabas, “Let us return and visit the brothers in every city where we proclaimed the word of the Lord, and see how they are.” 37 Now Barnabas wanted to take with them John called Mark. 38 But Paul thought best not to take with them one who had withdrawn from them in Pamphylia and had not gone with them to the work. 39 And there arose a sharp disagreement, so that they separated from each other. Barnabas took Mark with him and sailed away to Cyprus,40 but Paul chose Silas and departed, having been commended by the brothers to the grace of the Lord.](#) But after this fall from Paul’s favor, it is clear that Mark becomes one of the most faithful of the original followers of Jesus, and Paul asks for him or mentions him by name several other times. [Colossians 4:10](#) says, [“Aristarchus my fellow prisoner greets you, and Mark the cousin of Barnabas...”](#) This may explain why Barnabas stuck by him as family when Paul rejected his accompanying them. Then in [2Timothy 4:11](#), Paul tells Timothy, [“...Get Mark and bring him with you, for he is very useful to me in ministry.”](#) So Paul wants to be involved in ministry

with him. Finally in Philemon 24 he is mentioned in sending greetings to [Philemon in verse 24](#). ...and so do Mark, Aristarchus, Demas and Luke, my fellow workers. Finally, one mention of Mark from the apostle Peter in [1Peter 5:13](#). She who is at Babylon, who is likewise chosen, sends you greetings and so does Mark, my son.

This passage in 1Peter is important because the relationship between Peter and Mark is the reason that this gospel is even included in the Bible. Mark is not an apostle, and whereas Luke's gospel along with the book of Acts that he also wrote are clearly his well researched accounts of everything that has happened, Mark does not have those credentials. But going back to that man I mentioned earlier, Papias, in his statements on Mark writing the book, he was defending the book on the basis of Mark writing it based on Peter's account to him of Jesus. You see, from earliest church history, Mark has been included as a book of the Bible based on what seems to be accepted fact from even Peter himself if some historical records are accurate that Mark is writing the apostle Peter's account of the gospel. That makes a lot of sense when you work through the book and see a lot more detail and color given for situations where Peter is directly involved, because they are based on his first hand accounts. It also makes sense of the fact that this book dwells much more on Peter's failures, and he is the only apostle mentioned specifically in the final verses of the book. From 1Peter 5:13, we also see that Peter and Mark seemed to be in Rome at the same time, which is where historically this book is said to have been written from. When Peter says, "she who is at Babylon...and Mark" Babylon refers to Rome. This was a negative way that Christians would describe Rome at the time. Peter would go on to die in Rome, but Mark would share his gospel, his teachings about Jesus's life and ministry throughout the world. The time of the writing was likely around 63 to early 64 AD before the heavy persecution by Nero started, and his original audience seems to be primarily gentile since there are a number of places where Mark explains Jewish traditions. I could say a lot more about background introduction to this book, but I do want to get into the book today and see the theme of this book.

Unlike the gospels of Matthew and Luke, Mark does not give a genealogy for Jesus. And unlike John, he doesn't start with the theological nature of Jesus as God. Mark starts with John the Baptist and the baptism of Jesus. [Mark 1:9-10 says, 9 At that time Jesus came from Nazareth in Galilee and was baptized by John in the Jordan. 10 Just as Jesus was coming up out of the water, he saw heaven being torn open and the Spirit descending on him like a dove.](#) As significant as this event is, and it is significant, it is followed by an even more significant event central to the theme of Mark, the calling of the first disciples. [Mark 1:16-20 says, 16 Passing alongside the Sea of Galilee, he saw Simon and Andrew the brother of Simon casting a net into the sea, for they were fishermen. 17 And Jesus said to them, "Follow me, and I will make you become fishers of men." 18 And immediately they left their nets and followed him. 19 And going on a little farther, he saw James the son of Zebedee and John his brother, who were in their boat mending the nets. 20 And immediately he called them, and they left their father Zebedee in the boat with the hired servants and followed him.](#) Here Peter, named Simon originally, receives his call to follow Jesus. This sets the theme of the book, which is being a disciple or as I have titled it, "Following Jesus." It is through the eyes of these first disciples, in large part Peter in this book, that we really discover what it means to be a disciple and to follow Jesus.

The first 8 chapters of the book of Mark are spent showing the reader what Peter and the other disciples saw and experienced that convinced them that Jesus was who he said he was. They saw him demonstrate his unique nature as being God in the flesh in 6 different ways. *First*, they saw his power over spiritual evil. They watched him drive out demons. At

least 9 different times we see this in this book. *Second*, we see healing happen, showing him to be the Great Physician. We see lepers healed, blind people see, deaf people hear, a paralyzed man walk, and a woman who touches his clothing be healed from 12 years of suffering. *Third*, we get to experience with the disciples Jesus' power over nature. One of those times was what we covered for our VBS sermon this year where Jesus calmed the storm from the boat. But we will also see him feed 5000 men plus women and children from a few pieces of bread and fish. Impossible tasks for humans, but nothing for God. *Fourth*, we see the power Jesus has over death as Jesus raises a young girl back to life. As great as those miracles are and as much focus as this gospel places on them (there are more miracles recorded in the book of Mark than any of the other 3 gospels), the spiritual life these disciples experienced with Jesus impacted them perhaps more. Because *Fifth*, they were there to experience his prayers, both during his ministry and right before his death in the garden of Gethsemane as they experience the life that the Son of God has with God the Father. I would include in this idea the pivotal scene of the transfiguration that Peter James and John will experience in chapter 9 of Mark. In this event where Peter as usual doesn't know what to say, so he says something dumb, he sees firsthand this relationship as God the Father speaks from Heaven with the words of **Mark 9:7, 7 And a cloud overshadowed them, and a voice came out of the cloud, "This is my beloved Son; listen to him."** And listen was what the disciples did a lot as they *sixth* heard his teaching. The book of Mark does not contain a lot of the long teaching passages that Matthew, Luke and John do, but there are still key moments where Jesus taught and the disciples listened. And as **Mark 1:22 says, 22 And they were astonished at his teaching, for he taught them as one who had authority, and not as the scribes.**

These first followers of Jesus got to experience all of these 6 things and more first hand. And it changed them. We see them move from simply learning to telling others what they were learning as they are sent out in chapter 6 to proclaim the message of Jesus by preaching repentance and the good news that the Messiah had come. **Mark 6:7 says 7 And he called the twelve and began to send them out two by two, and gave them authority over the unclean spirits.** And then verse 12. **12 So they went out and proclaimed that people should repent.** This too is part of discipleship. Following Jesus means telling others about Jesus and calling them to the same type of discipleship, which involves faith and repentance. All of these activities and things that the disciples are experiencing are leading to the one of the central points in the book in **Mark 8:29**, where Peter answers Jesus' question of who he is with the words, **"You are the Christ."** In other words, you are the Messiah. The demonstrations of Jesus's authority that have happened throughout the first 8 chapters have demonstrated to Peter that Jesus is indeed the long awaited Messiah, who would save his people from sin and captivity. But then the second part of the book starts as Jesus twists Peter's view of the Messiah and describes the Messiah's path as one of suffering and death. **Mark 8:31-33 says, ³¹ And he began to teach them that the Son of Man must suffer many things and be rejected by the elders and the chief priests and the scribes and be killed, and after three days rise again. ³² And he said this plainly. And Peter took him aside and began to rebuke him. ³³ But turning and seeing his disciples, he rebuked Peter and said, "Get behind me, Satan! For you are not setting your mind on the things of God, but on the things of man."** We see so much of Peter in this book, but he never tries to build himself up. The stories he shared that Mark recounts show the negative aspects of Peter. He like the other disciples failed to see what Jesus will now tell them plainly on 3 different occasions, that the reason he came is to die. He showed them that he was the Messiah, and why they should follow him; but now he shows them the type of Messiah, the type of Savior, that he is, the suffering servant. He was not going to be the conquering king. He would bring salvation through his suffering. While the disciples were arguing over who would be

the greatest among them, Jesus was leading them to see that following him meant serving others as he would serve humanity on the cross. In **Mark 9:33-35**, we read, **33 And they came to Capernaum. And when he was in the house he asked them, "What were you discussing on the way?" 34 But they kept silent, for on the way they had argued with one another about who was the greatest. 35 And he sat down and called the twelve. And he said to them, "If anyone would be first, he must be last of all and servant of all."**

The book of Mark is a book of action. There are no long teaching passages, but instead short statements that showed movement and action happening. They came here. They went there. And that is the way every chapter through chapter 10 moves, but when we get to chapter 11, as the final week of Jesus' life begins, we start to slow down and the momentum builds to chapter 14 with the Lord's Supper as Peter is told that he would deny Christ 3 times while his Savior went to his death. From there we see Jesus in the Garden of Gethsemane praying and being arrested. This is leading to Peter recounting through Mark his greatest failure in **Mark 14:72** **72 And immediately the rooster crowed a second time. And Peter remembered how Jesus had said to him, "Before the rooster crows twice, you will deny me three times." And he broke down and wept.** The disciple had failed to follow Jesus at his greatest point of need, and it deeply affected Peter for the rest of his life. Because after this the one he denied, that all of us in one way or another have denied, willingly allowed himself to be laid on a cross, taking on himself all of our sin and God's wrath. And under that burden, Jesus cries out in **Mark 15:34** **34 And at the ninth hour Jesus cried with a loud voice, "Eloi, Eloi, lema sabachthani?" which means, "My God, my God, why have you forsaken me?"** and verse 37 tells us, **"And Jesus uttered a loud cry and breathed his last."**

Of course, that is not the end, chapter 16 shows us why disciples still follow Jesus, and why Peter himself, the denier of Christ continued to follow Jesus until death. Three ladies on their way to anoint a dead Jesus with perfume hear from an angel in **Mark 16:6** **"Do not be alarmed. You seek Jesus of Nazareth, who was crucified. He has risen; he is not here. See the place where they laid him.** And then for the purposes of our fallen disciple Peter, we see the greatest message that he could ever have heard in verse 7 of **Mark 16. 7 But go, tell his disciples and Peter that he is going before you to Galilee. There you will see him, just as he told you.**" You see at the end of this book, and this is the end. Verses 9-20 are later additions that do not really belong as part of the original, and I will deal with them in the last sermon from Mark. But at the end of everything we see that following Jesus is not about perfection, it is about grace. It is about forgiveness that comes through a loving Savior who went to the cross for Peter who denied him, but also for Ben who denied him and all of us who are sinners in need of a Savior. This book is not about Peter, the poor follower, it is about Jesus, the loving savior, and about what it means for us to truly follow him. Let's pray.